Canon

キヤノンメディカル遺伝子かわら版

研究編　Vol. 1

発行2020年5月8日

キヤノンメディカルシステムズ株式会社
国内営業本部　検体検査システム営業部(担当：山本)
〒212-0015　神奈川県川崎市幸区柳町70-1
TEL：03-6369-9648　FAX：044-920-2161

今月のトピックス

等温増幅遺伝子増幅で2つの菌をどうやって同時検出する？ 事例公開中!?

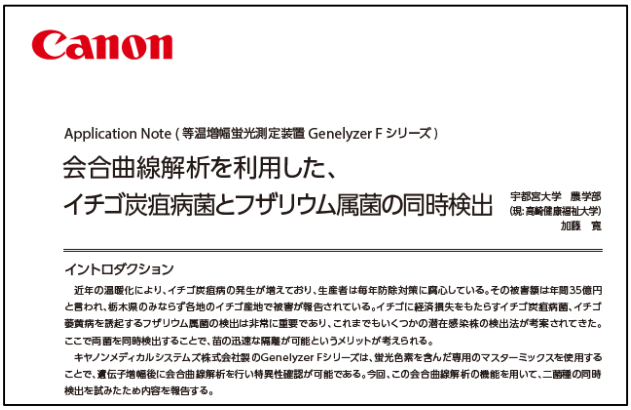
さて、今月から弊社の関連情報を皆さまにお伝えさせて頂きます。

弊社の等温増幅蛍光測定装置 **Genelyzer Fシリーズ**は、遺伝子増幅の**蛍光強度の変化をリアルタイムでモニタリング**する装置です。

実は増幅をモニタリングする以外に、この装置は**「アニール」**という機能がついています。増幅工程の後のアニール工程では、温度をゆっくり下げて、蛍光強度の温度変化をみることで、**核酸が結合するときの温度がピークとして検出**されます。

今回その機能を用いて、宇都宮大学　農学部（現：高崎健康福祉大学　農学部）の加藤先生に、二菌種の同時測定の事例をまとめて頂きました。**菌種によって、検出されるピーク温度が違うため、2こぶのピークが見られた面白い事例です。**webで公開していますので是非ご覧ください。

>>>　キヤノンメディカル　会合曲線解析


Canon

Application Note（等温増幅蛍光測定装置 Genelyzer F シリーズ）

会合曲線解析を利用した、
イチゴ炭疽病菌とフザリウム属菌の同時検出

宇都宮大学　農学部
（現：高崎健康福祉大学）
加藤　寛

イントロダクション

近年の温暖化により、イチゴ炭疽病の発生が増えており、生産者は毎年防除対策に腐心している。その被害額は年間35億円と言われ、栃木県のみならず各地のイチゴ産地で被害が報告されている。イチゴに経済損失をもたらすイチゴ炭疽病菌、イチゴ萎黄病を誘起するフザリウム属菌の検出は非常に重要であり、これまでもいくつかの潜在感染株の検出法が考案されてきた。ここで両菌を同時検出することで、苗の迅速な隔離が可能というメリットが考えられる。

キヤノンメディカルシステムズ株式会社製のGenelyzer Fシリーズは、蛍光色素を含んだ専用のマスターミックスを使用することで、遺伝子増幅後に会合曲線解析を行い特異性確認が可能である。今回、この会合曲線解析の機能を用いて、二菌種の同時検出を試みたため内容を報告する。

今月のQ&A

・Q:　Genelyzer FIIとFIIIの2機種がありますが、どう違いますか???

・A:　大きな違いは、一度に検査する数です。FIIは8連チューブを1本、FIIIは8連チューブを2本、挿入できます。通常、8連チューブ1本のなかに、ポジティブコントロールとネガティブコントロールを1つずつ立てますので、残りで6サンプル分の遺伝子検査をすることになります。

担当者のつぶやき

今月から「キヤノンメディカル遺伝子かわら版」と題して、ニュースレターを発行していきます。近況などをこのニュースレターでお伝えして行ければと思っていますので、温かく見守って頂ければと思います。

またこの記事に関わらず、知りたいこと、不明点などありましたら、お気軽にお問合せください。(山本)

MTS-A-08-00947